花岡利昌・東　修三編

ハウスクリマ

—住居気候を考える—

海青社，1985年，302頁，5,500円

ハウスクリマ（Hausklima）と言う言葉になじみの薄い読者がおられるかも知れないが，副題にあるように，ハウスクリマの内容は，住居の目的である「雨露をしのぐこと」に対する合理性の追求である．最近ではそれに省エネルギーの観点からの研究，住居に限らずそれぞれの目的を持った倉庫，収蔵庫などの内部の環境管理にもその研究対象が拡がっている．

ところで，京都府立大学の東　修三博士は奈良女子大学の花岡利昌博士らと，1965年以来ハウスクリマに関心を持つ同学の士に呼びかけ，これに関する研究会を定期的に開催されて来た．今回出版された本書は，この研究会の都度発行されて来た予稿集の集大成であり，予稿集の中からまとまった研究成果として発行されたもの40編を選んで収録されている．予稿集というと，気象学会の春秋のそれを連想し，B５，１ページのものを想像するが，この場合予稿集とは言え平均５ページ，長いのは20ページ近いものもありそれぞれ読みごたえがある．1984年までに発行された10冊の予稿集を再編集し，４章にまとめられている．すなわち，第１章　伝統民家の住居気候，第２章　住居気候の建築的調整，第３章　住居気候の設備的調整，第４章　温熱環境の人体影響である．

第１章では北は北海道のアイヌ住居から南は石垣島の民家まで，15件の住居を対象とした観測結果について合計９編の論文が集められている．その中には前述のアイヌ住居の他，白川村の合掌造り，石垣市の宮良殿内，東京都で復元された竪穴式住居など文化財的にも価値のある建築物を対象としたものもあり，さらにその中に実際に住み込んで環境を調査するというような民族学的手法も試みられている．

第２章では主として建物の材料が建物内の環境にどのような影響を及ぼすかについての話題が10編まとめられている．壁の材料による影響，屋根の形状および材料による影響などが含まれている．

第３章では室内暖房のある時の室内気温を室外気温，風などの関数として理論的に求める問題を始め，床暖房，除湿機，扇風機の使用が及ぼす室内環境の変化が理論的に，あるいは実態的に追求され，９編の論文が収録されている．変わった内容としては寝床の環境とか，屋根上の消雪設備についての研究も取り上げられている．

第４章では室内環境の人間に及ぼす影響ということで，ハウスクリマの中でも最も“物理学”には載りにくい分野であるが，多くの実験を積み重ね，その中から統一的見解を導き出そうとする努力が12編の各論文に見受けられる．このような人間の感覚にかかわる分野は，ハウスクリマの最終目標ともいえる“如何に人間に快適な環境を作り出せるか”に基本的にかかわっており，今後の発展が特に期待される分野であろう．

以上，本書の内容を簡単に紹介したが，本書を通読して感じたことは，この中に含まれている論文は，一貫して，観測データに忠実で，それを大切にしようとする姿勢が示されていることであり，読者にとって有難いのは，それが読み取り値であれ，自記記録計のコピーであれ，元のデータが豊富に掲載されていることである．これは本書が資料集としての意義を持つことを示している．この意味で，本書が予稿集からの再録であるとしても索引が完備しているのも嬉しいことである．難を言えば5,500円がちょっと高いなということであろうか．しかし，それも立派な装丁を見ればあまり文句を言えないかも知れない．

ともあれ，本書はハウスクリマ研究歴数十年のベテランから気鋭の新進学徒までの執筆陣を揃えた異色のハウスクリマ専門書と見ることができ，ハウスクリマの進歩を展望し，将来の道を探るのに類書を見ないものと言えよう．住居学の専門家はもとより，気象学，建築学，生理学，伝熱工学，空調・制御工学などの分野の方々に御一読をおすすめしたい．　（佐橋　謙）